遠山奇談

五之八

一

へ13
4437
1

N13
F437
1

寛政十年戊午之春大新板

# 遠山奇談

全部四冊

平安書林　華箋堂

遠山奇談序

わたくしのふるさとぬまのなかむら梅のきしのもとにうまれしをもいでもさきのさとなりいでば煙巡りくるしきをつくれば華洛みやこうれが奇談をまねあらしの発きて序をふれのれるこころ大志もわめんこなかふむ山よへてけしをとるにこれまん

らくようきりはまきの墨てを重
ねうとうさびし雪ふかまさぶ
るいづれらくりけりをあ
るるどくるれいまるるのはまぶふ
人乃無るやなんと第四
とりてはたちにたちぶふ
寅ん汲十うるまれまるる乃日
海陽浄林坊雅恵
しるす

# 遠山奇談 目次

## 巻之一


第一章 彫刻
第二章 新しく材木をさづる事
第三章 遠山へ尋ねて山入し事 附に天狗の
たいがるるきの事 田村丸石解の事
第四章 四十八瀬川光の山
日つりぶねの由来
第五章 牡丹山京丸と申す事


## 巻之二


第六章 秋葉奥の院石みすの事 附たく事
附一点水 山住花沢 みさくべりみくの事
第七章 奥山辛ちつてきふ遠国猟師 云ふと申すひ山へ入
けやきの大木多く 又仕る事
第八章 山中ふそびりて一篇
大ひさごるふ遠事
第九章 大木の中より大雪降り
三人九ごの猿の事
第十章 ちるうちん杉の由来
小畑へうさびくうちんと

巻之三
第十一章 平太つゞ寺にて墓のうけを出して又絶てる事
第十二章 遠くづれ山 西ごう山 いづれも後嫗の事
第十三章 山中に宿り白き又雅犬にあり 嫦娥にあひ人ぐちうろたる事
第十四章 山中に宿りけるに夜あをお會 夏の蛇ある事
第十五章 きじんの家にやどり ころび木とえおん事
巻之四
第十六章 殺すの仮つくし山へ入る 岩茸山に手入る事
第十七章 岩茸に見まくつれかり 天狗につまれしと考る事
第十八章 天狗のうちと論じて 後家に喰はしる事
第十九章 木を伐ぬる 神前にとえて大蛇斬りせし事
第二十章 赤松のうちれ大山の山くの杉は 大木代りぶせし事
大尾
遠山奇談目次畢

# 遠山奇談巻之一

## ○第一章 發端

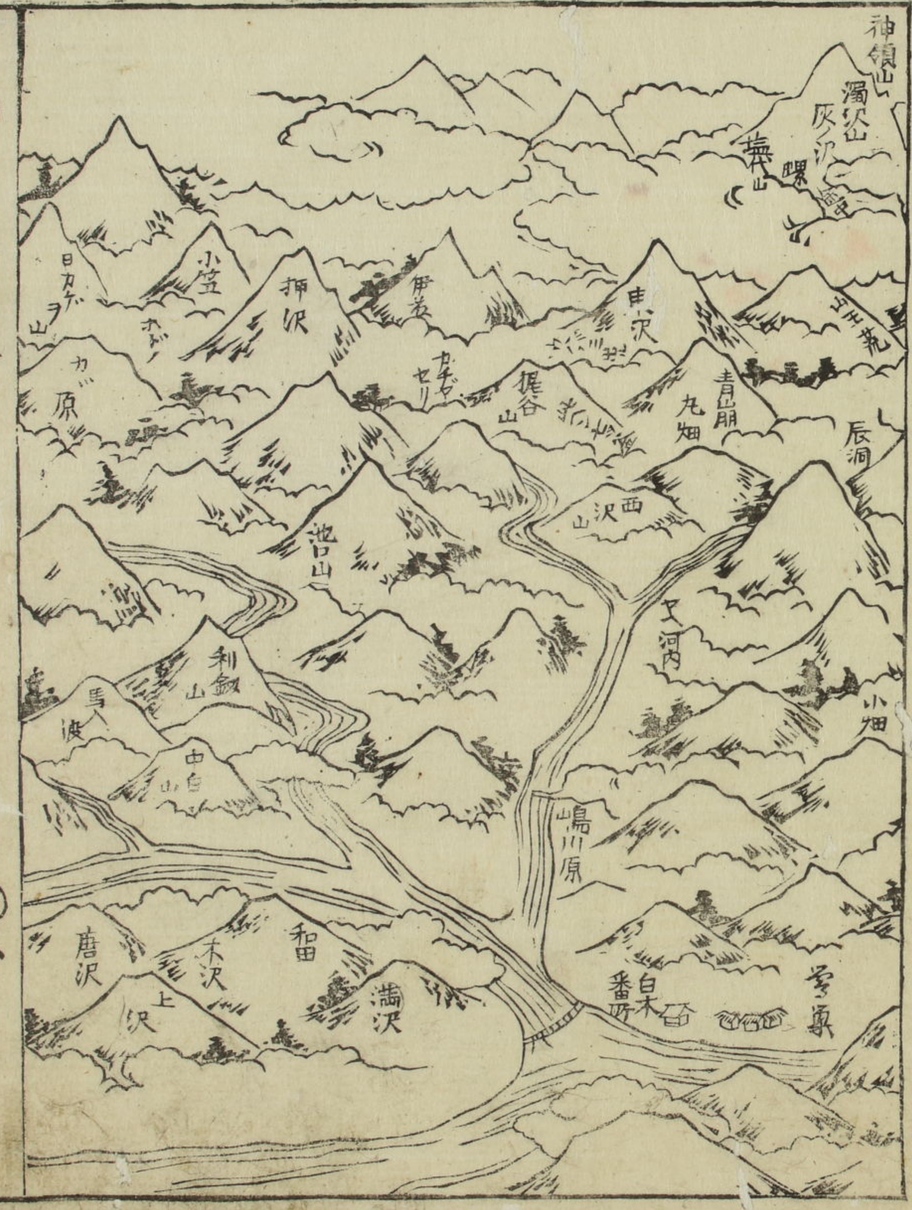
天明八つのとしむつき晦の夜亥の天に風はげしくて野河のほとり火出て火を吹き海へうつるより。都のちまたおりなく火となり。かけまくもかしこき禁裏も時のまに火うつり霊佛霊場も赤はりなく焼ぬ。天災災禍と焚焼しく灰燼瓦礫の塵となる。いでや年頃のりと出せしれ霊場へ。都の南にかくれなき伽藍なりしも時の中に火うつり殿堂ともに灰燼となれり。力うしなひてさく時うる此火の燃けてなおべきよし。その日まで炎がみし

門備備前の御花園といつる人再び来りしことなりし
雨降枝とうるわせた園に門業いと再びせんばく
き生る花花ひづくに付てきまぐも知らくまりあり然
歎胸ふせまり生ふまものづくに芸とけるに花まれる
大堂なれば五ろうなふきさも知ふ柿るべーと云あり
つくーまふくーに門屠くいーけくびくに大堂ろうしけい
義士山へ山へ知られてぬくたそろひぬくくひくびいそこ
ふくるくぬくさとくるくさとくるくぬくるにきに
演技くいふ歎技くくに情んをゆくび義起て門流よ
ろり新貴擢身技ゆふたくび行辛ふふ木と

まくむくーやくつかふきと山のくとくとくしとくけきと山
紀行とくとくくに少に柿るくくくるれば生なくんくと
ねくくくに年とりそくびめ行りとくくるんくくり

○半二章　行く材木とたづ
よくくく御材木いかくくくくりたづよくくくんくくく
ふく幸に生ぶれいくくれ業実いくしぬきい信州きと山
のくくのくとキくるんくくなくり
時い天羽八つのくきくくんくくに半けそのくくくくくく
きくのくくうふいざなられ野ふのくくびふ歳とうせーふ門
業の流いくれふ引くくくくりれくくる再びせくくくくと

遠山
畧繪圖
杜丹山
山住權現
奥院
遠信カサ
秋葉山
和留谷
光明山
平山村
大滝村
西村
鳥羽山
三方原


神領山
濁沢山
灰沢
塩山
螺山
小笠
抑沢
伊茂
申沢
青山朋
丸畑
辰洞
捉谷山
西沢山
池口山
河内
利鈴山
馬渡
小畑
嶋川原
唐沢
木沢
和留
上沢
満沢
白木番所
雲原

むかし七つ木を植ゑ〇すゝむる事をのぞけりて
村の風体（ふでい）はめでたきことゞもから起所（をきどころ）もと
こゝし遠州（ゑんしう）信州（しんしう）の深山（みやま）へたなりまじりんとゝ椎茸（しいたけ）
草木（くさき）をとりのを朝（あさ）まで手当（てあて）して費（ついへ）をいとはんと大木
おりやうやと名まへべしせりは恐（おそ）るといへども未（いま）だ
寒（さむ）き所で日夜（にちや）とまうじんをとこふうつせうに三歳（さんさい）
もらしえ夜ひもじし其の所の椎茸（しいたけ）半紛まじ蔓（うる）
未（いま）だ成（なり）しもいふ遠き（そせき）あり濱松（はままつ）の者（もの）へ立越（たちこえ）る其の所り
山中（さんちう）ふか奥山（おくやま）へいりて織男（おりを）なるもふさきつるに見より
久（ひさ）しき九八里あるさきにて信濃（しなの）駿河（するが）甲斐（かひ）遠江（とほたふみ）の山へ



かゝる九四十里四方といふうちは世遠山（とほやま）といへるに
楸（けやき）の大木あるは世と思ひつりし去りてせんば濱松（はままつ）の
人々是（これ）とまてていでや日来（ひごろ）の願（ねが）ひ叶（かな）ひたりとて歓喜（よろこび）
踊躍（おどり）ともふ檀越衆（だんおつしゆう）へねがひしとこゝろもものにてる
さてなりたるもちちてそれ

○第三章

遠山（とほやま）へいりくるは天竜川（てんりうがは）旗河筋（はたがはすぢ）大竹村田村尾石岸（せきぎし）

大木ありて樹（き）あしくさしけれはさいはひかて　いざ山
いりせんとて山探（やまさがし）とてうむ子年七月のうしろ文起来り
獣松（れいしやうど）猿猴（さるさる）の源之助光吉等三名七人とで
はしまるに七人にて組（いざ）ひ卯月八日に暁（あかつき）に深山（みやま）辺（へん）に向（むか）ひ

此山入口に付て番人ありこれを見とがに制し必ずまんべんと合てそ
法ふさぐ見とがに制し必ずまんべんと合てそ
行る板倉村と立出り八里行ふ鹿沼村より今宮
天満宮の日本みつく大にの七ちの七てちと水とい瓶形の湖水
り流出るこれ遠に柳橋幾きぐ七十八里の流るる懸流
三河遠に流れ出るより狭出て立木らどく此川に流れ
ちりくり材木すき一の貢とする御蓄所と立る此行りふ
横に脇大竹杯と崖に付り此所い岩郷として流る
水すきぐくいりくり測とうりて有とごぞるるが第一
大蛇とて有とうるふ有くけ有りのくに悪あると



情て田村将軍つかふ大蛇と退治ひたりと此社地ふ
石ふけり付けとと云て是と云なん石脇に田村丸の志賀
と云て今ひろて今に今まで付る有りて懸り宮体とうに
これりるれどと然て二候宿ちどりつる宿して蔵とれし丸

## ○宋四章

四十八瀬川光明山つりぐよの由来

所月九ヶ日ふなる村ふかくて大十町の間より四十八瀬川あり
此て川谷川岸八度こる長さ八町りくて又うり
長さ八町りくて又うり光明山とくくと下石下こと
みるとなるる險阻難所くく本くに屋にかくて日乳とあ
くあるこして住ひけ未まれうり頂とに光明山大橋坂の
社と崖り立くぬ厳造縄くくめりきくいくんくと

きく庭空藏并と本地堂とに門かまへづくりして茶屋
などの家ありしが都の清水ふいてきくみたり
ぶ方ちかく
ちなみに古戰場三方が原と用意ゆえ西は海
岸の湖ゆ演石のたりめるたりと三河序演ゆこ持ちるう
むくに乗る水濱大船うどしく帆あげるくれらい伊豆の
下田の濱ふ出つる遠江の濱鹽とうくはしてうれ陰流を
ならうくながめつる絶景くゆ光明山ゆ大樓觀に完の山ゆ
あり是と見るに元春寺中の法堂ゆ甲斐の信玄演松へ
柳ゆ立ちとまりゆ演松樹に光明山に陣とる甲斐勢い
秋葉山ゆ搦手ゆ出ふたうい家くゆ東南の手ふ



敵勢と遠ゆ見ゆる時甲斐勢ゆ光明山へ押ようゆ
ありしが演松樹いまだ山中ふ籠りし本國ゆりうくの
士卒いそく松明とりたてゆ兵具の書ゆくえ
はりぶよ三ふりふ書さいぶくたちふ甲斐勢敗軍ゆて
きりぬいうれい此利運やうるとうぶるに全く光明山演
の天狗加勢ゆうるうんとゆりゆ安樂ゆりしうん
此時ゆりぶふ完ゆてゆぶれゆるくゆふ本堂ゆとうふ
是くゆ人皆これとうんくゆ感ぜぬゆう

○光文章　でうんふ京光の里ゆ来

光明山ゆりゆとゆ文十ゆ是魂魂ゆ八雜寫ゆく和田の

光明山
惟仁の
墨國

谷宿も有 家十五軒 大居村あり
（此村は京の下しもの宿なり 此村に一の宮あり
ありのぶり 家十五軒 かの宮 きのの姥家 くもの〳〵 ぎ
こゝより 丈けといへ 私 こゝ あり 大井川
けれこゝより 海 山奥 京丸の里 いへ それに 牡丹
つゝ 大山 あり 流 こゝ 丈 川の川 と
つゝ 分 流 ぶ 京丸の里 はきぬ 里人 いへ 山 能
より 人 家 保 ころ 紙 あ 山 川
網 など 流 る 奥 に 人 家 る 山 と
此 け ふ ぐ ふ そ の 武 安 に 深 ち れ と た ぬ
と り と け ら と は ま ひ 為 に 家 居 六 軒
あり 男 女 十 人 家 住 り 武 安 出 合 る あ い も は



ゝ 丈 な も あ り 男 ハ 無 袋 ゝ ひ げ ち ゝ ゝ づ れ も 長
女 ハ 袋 ま は な 長 い 長 藏 の ま と そ て ふ 見 る
ま ま の 袋 ま れ ど も 住 居 い 網 な に い る と 自 中 ふ 実
ま ゝ む る ま る 五 人 の 海 ま あ り や ま ゝ ま ひ ま ゝ た
山 里 へ い る 人 ま ゝ ま り ま ま り 保 ま と ゝ ま ひ 出 ゝ 出 年 雅 年
く ど き 菓 ま ど と 物 ゝ 紙 ま ま め と 絹 米 ま こ れ と 物 る
な り 住 ま て ま と ま ま い づ れ も 丈 に ま ま れ ま て 山 里 へ
く る 人 い な ゝ 山 里 の 中 米 と ま る わ ゝ め ゝ こ ゝ ま る 山 ま と い
ひ ま り 京 丸 の 里 と ま ひ ま ま ま ゝ ゝ 先 祖 ま り 大 丈 人
ま ゝ ま ま て 山 山 奥 へ 分 と 里 何 ま と ま ん ま 人

これよりいより十六代より此里の長をとりしに風早佐左衛門の
佐と申ゝもの武蔵守の臣也しが定めなく浪々する
ものなりしが此郷へ来りいらふにも浪々してありし太刀一振長刀
一振丸鏡一面歌学聖人の御筆物二つ家集縁起と相見
したる奇書十冊ほど持しが太刀長刀家集縁起は此ありしは
此ふびの山ぬけふりせしより今は鏡と聖人の御筆物のみ
氏神あるひは稀なるものゝごとくひきなし迄さへに新に氏神として祠
此里へは宮なる社も祠先祖を祭るも聖人の御筆物を
朝ひ夕むかし此里人崇まりたる時も是にむかひ氏神
しく崇めるを心へたり此時より檜原郷の貢と

まうし定まりし学問の道を開きしと今の風子
続集の佐ふ此あらたりを守護年久しく浪々して祖師聖人の
今一軸は三方正面の法然上人の御筆の中にも一軸は六字御名号
いかなる正面のごとくに顕るる図ありしか画像となりて感ずべきなかれ
此里の牡丹ふしぎは此ぼたんの大木多くありしを中にも
大なるは二かかえあまり高さ十丈あまりとて花の大さ
ぞ一尺あまり書笠のごとく縦し白く茎しく蓮の
姻ありてふるきものゝためしありしより此むかしにも
日ぐ此がん山と読じて此寺のいかなる獅子に牡丹
といふてありしが今都ぶる里の花盛に咲きほこれるに
て名高きとふ此者のたぐいにかかるもの香ばしく
たゞむかしとうちもふるさとかへりしものがたり
此牡丹の名所ふ牡丹の大木と相かはりてなおつけられ
このたびはまた何と此牡丹のこゝろなる

べーしらつく年こころのとゝ今は相見ばこゝ衣居村そぐ
うくゝく鼠じゝ
ものの左りあるこゝろりぬ法名号の宗旨ある也へうや
念仏とそひさるなり之くあれどいうるこゝふや宗旨わ
様ふるこゝとうりぬ時事をんくも全くは村木に
ひとやどゆるこゝうぐ者ぬ也こゝいむくゝどりくゝで受也
さて衣居村りスナ丁のどりく社業の門弟文義ふ
うりくゝ更とあくゝぬ

まと山寺誌巻之一終